

〈追悼〉

故青木次彦先生の業績を回顧する

宇治郷 毅

はじめに

2009年2月8日、本学元文学部教授で司書課程を担当されていた青木次彦先生が逝去された。享年86才であった。本誌『同志社大学図書館学年報』（1975年創刊）の生みの親である先生に対し、現在の司書課程、司書教諭課程担当の教員を代表して心より哀悼の意を表するしだいである。

先生は、1944年9月国学院大学国史学科を卒業、戦後京都大学国史研究室嘱託をへて、1948年9月同志社書記として入社、大学図書館にながく奉職された。閲覧課長在職中の1970年4月司書課程担当の専任教員として文学部文化学科の専任講師に着任された。以後、助教授、教授をへて、1988年3月定年退職されるまで、18年にわたり本学図書館学の研究面で大きな業績を積まれた。また同時に司書課程担当教授として多くの有為ある司書を養成されたが、現在本学出身の司書が多くの図書館現場で活躍しているのを見るにつけ、司書課程担当の他の先生方の努力もさることながら青木先生が果たした役割も大きかったものとあらためて敬意を表するしだいである。

先生の退職時、同志社大学文化学会はその機関誌『文化学年報』第37号（昭和63年3月）を「青木次彦先生退職記念論文集」にあてており、そこには「青木次彦先生略歴並びに主要業績」が掲載されている。しかしそこに掲げられている業績は「主要」とされている「著編書」名と「論文」名を単に並べただけにすぎず、先生の業績のごく一部にすぎず、また先生の業績内容についての紹介、評論等一切なされていない。私はこの点ながく遺憾に思っていたところなので、この機会にあらためて業績を回顧して、若干の解説も加えて、先生を偲ぶこととした。（論著名の後に解説を付したものは、私が主要であると判断したものに限っている）なお私は、生前一度しか先生にお目にかかっ

たことはないが、同じく長い図書館現場出身の教員であり、また専門分野も図書館史など若干オーバーラップするところがあり日頃から親しみを感じていたことをつけくわえておきたい。(以後すべて敬称を略す)

1、教育面での業績

業績の筆頭に挙げられるのは教育面であり、本学司書課程の基礎を築いた小野則秋(元文学部講師)と吉田貞夫(元文学部教授)の後を継いで現在の司書課程を発展させた功績が大きい。前二者が本学司書課程の創設および基礎固めの功労者とするなら、青木教授はその基礎の上に発展期を作った功労者と言えよう。本学における司書課程は、「同志社大学図書館学研究会」(1941年4月発足)「同志社大学図書館学講習所」(1946年10月発足)時代の図書館学教育の実践の上に1952年4月に発足し、以後順調に発展してきた。大体現在の課程の枠組みができあがるのは1960年代後半である。図書館学科目が文学部文化学科に設置が明示されるのは1954年である。司書教諭課程が併設されたのは1962年である。司書課程の関係事務が図書館より教務課教職課程係に移り明確に大学の一事務組織で分掌され、運営のための学内組織として「博物館学芸員課程・図書館司書課程委員会」が設置されたのは1967年である。青木教授は、70年4月に着任以来、吉田教授のよき同僚として、図書館学教育を大学教育の中で確固とした位置づけを得るために尽力された。そこには図書館学そのものの学問性の確立への努力だけでなく、大学当局および教授会との関係などで苦慮する場面も多かったようであった。

またもっとも重要な設置科目については、「図書館法施行規則」(省令)のたびかさなる改正に合わせて本学の設置科目、単位数を改正していった。1970年代以降の司書資格取得の要件単位の基本が成立するのが1968年3月の省令改正であったが、本学では総設置科目・単位数を14科目30単位とし、省令に準じて必須・選択を定め合計24単位以上の履修を司書資格の必要条件とした。1974年さらに改訂されるが、これは青木教授が着任以後のことで、吉田教授のよき協力者となって改定作業に当たられ、その後の課程充実の端緒を切り開かれた。この時より司書課程科目は、図書館・情報学Ⅰ 4単位(旧図書館通論・情報管理各2単位)、図書館・情報学Ⅱ 4単位(旧資料目録法、

資料分類法各2単位)、図書館・情報学Ⅲ 4単位(旧図書館活動、参考業務各2単位)、図書館・情報学Ⅳ 4単位(旧図書館資料論、人文科学および社会科学の書誌解題各2単位)、図書館演習Ⅰ 2単位(旧図書館演習4単位)、図書館演習Ⅱ(旧同上より分離)、図書館史2単位、図書館学特論2単位、資料整理法特論2単位、社会教育学2単位、社会調査2単位、視聴覚教育2単位となった。

青木教授が本学の図書館学教育に直接関与するようになったのは、二十才代末の大学図書館員時代からで、その最初は1950年の「同志社大学図書館学講習所」の第五回「講習所」開設の時であった。担当は「目録編成法」であった。青木教授は1970年就任以来、「図書館演習」(70年度～87年度)、「図書館・情報学Ⅰ(旧図書館通論、情報管理)」(76年度～77年度、81年度～84年度)、「図書館・情報学Ⅲ(旧図書館活動、参考業務)」(70～87年度)、「図書館・情報学Ⅳ(旧図書館資料論、人文科学及び社会科学の書誌解題)」(75年度～76年度)「図書館史」(75年度～87年度)「図書館学特論」(75年度)を担当された。

前任の吉田教授は1960年10月本学司書課程の最初の専任教員となったが、1970年4月より1名が増員され青木が専任講師として着任し、以後現在までの司書課程担当専任教員2人体制が確立した。その後青木教授は、吉田教授退職の後任として渡辺信一(京都産業大学専任講師)を本学の専任講師として迎えるのに尽力し、課程の円滑な運営を実現した。

(参考文献：青木次彦「同志社大学図書館学教育史稿」『図書館学の教育』日外アソシエーツ、1983、『同志社大学図書館学年報』1975年～1988年)

2、研究面での業績

(1) 同志社大学図書館学教育に関するもの

(編著書)

- ①日本図書館学会研究委員会編『図書館学の教育』(論集・図書館学研究の歩み 第3集)日外アソシエーツ、1983年

「同志社大学図書館学教育史稿」pp.41～64

(1941年4月の「同志社大学図書館学研究会」の発足以降、「同志社大学図書館学講習所」をへて1952年4月の「司書課程」の成立とその後の発展過程

を通観したものである。1980年代前半までの本学の図書館学教育の歩みが記述されている。各種の原資料をふまえ、主観を排しできるだけ正確に歴史をあとづけ、本学図書館学教育の特質を明らかにしようとした論考である。この論文と次の『同志社大学図書館学年報』論文とを合わせたものが、本学図書館学教育について書かれた論文の中ではもっともまとまったものとなっている。）

(論文)

- ①「同志社大学図書館学研究会について—同志社大学図書館司書課程30年史料(その1)」『同志社大学図書館学年報』8号、1982、pp.94~100
- ②「同志社大学図書館学講習所の創設—同志社大学図書館司書課程30年史料(その2)」『同志社大学図書館学年報』9号、1983、pp.84~91
- ③「第2回同志社大学図書館学講習所の開設—同志社大学図書館司書課程30年史料(その3)」『同志社大学図書館学年報』10号、1984、pp.70~74
- ④「同志社大学図書館学講習所第3回—第6回の記録—同志社大学図書館司書課程30年史料(その4)」『同志社大学図書館学年報』11号、1985、pp.76~95
- ⑤「同志社大学「図書館学」の開講—同志社大学図書館司書課程30年史料(その5)」『同志社大学図書館学年報』12号、1986、pp.86~96
- ⑥「同志社大学「図書館司書課程」発足とその後—同志社大学図書館司書課程30年史料(その6)」『同志社大学図書館学年報』13号、1987、pp.70~79

(①から③は、本学の「図書館司書課程」の前史をなす「同志社大学図書館学研究会」(戦後「同志社大学図書館学会」となる)と「同志社大学図書館学講習所」の活動を扱ったものである。①では、昭和16年4月から昭和20年12月までの全38回にわたる研究記録を『図書館学研究会記録』から、月日、発表者、題目を中心に収録している。最初は館員の資質の向上、図書館の本質理解、書物に対する認識、学問研究法の習得をめざして臨時の講習会として出発、しだいに常置の研究会となり、公開の研究会に発展した経緯が記述されている。戦時期に、毎月一回のペースで図書館をめぐるさまざまなテーマが地道に研究されていた情熱に感銘をうける。②~④は前記の研究会活動

を引き継いで1946年から1951年まで開講された「同志社大学図書館学講習所」の記録である。この講習所は、戦後日本における図書館員の研修・養成機関としてもっとも早く設立されたものとして日本図書館史、日本図書館学史、日本図書館学教育史に名を残している。『同志社大学図書館学講習所趣意書』や『募集要項』『申込書』などの原資料から、講義題目、講師、単位、時間数、講義用テキスト名などが収録されている。また修了者名も記録されている。『趣意書』には、新生日本の文化を図書館の立場で担おうとする希望と決意がよく表明されている。本講習所は多くの有能な図書館員を輩出したのであるが、運営に関与された先人達の苦勞もしのばれる資料が多く収録されている。⑤は、「講習所」から正規に司書課程が発足する転換期について述べられている。まず研究会主催の「講習所」から大学の正規教育である「夏期大学」に図書館学科目が設置された1951年の状況が述べられ、続いて1952年に文学部に「図書館学」が自由選択科目として開講され、正式に司書課程が発足した時期の資料が紹介されている。⑥は、1953年から1955年にかけての司書資格取得科目が文学部の「自由選択科目」、教職課程の「専門選択科目」、夏期大学に分散していた複雑な状況が、『同志社大学要覧』『同志社夏期大学』『同志社大学夏期大学図書館学聴講案内』などの資料で明らかにされている。この体制は1960年度まで続き、すべての司書課程科目が文学部文化学科に統合、再編されるのは1961年度以降である。したがって①から⑥の記録は、現在の司書課程の体制が固まる1960年度以前の歩みをはじめて原資料をもちいて丹念にあとづけたものとして評価できよう。）

（2）日本における図書館学担当教員について論じたもの

- ①「わが国の図書館学担当教員の現状—日本図書館協会図書館学教育部会昭和52年調査を中心に—」『同志社大学図書館学年報』8号、1982、pp.37～43

（『図書館学教育担当者名簿 昭和52年調』（日本図書館協会、1978）を中心に日本の国公立大学における図書館学担当教員の年齢構成や出身大学について分析したものである。）

(3)「図書館」及び「図書館学」の発展過程を歴史的に論じたもの

①「“図書館”考」『文化学年報』23/24号、1975. 3、pp.33～63

(本稿は、日本の明治10年代に造語された「図書館」という言葉が使われるようになる前に、特に幕末、明治初期にどのような言葉が欧米の近代図書館をさす「library」の訳語として使われていたかを考察したものである。著者は「図書館」という言葉が近代日本図書館史や図書館学史の中で今まで詳細に検討されていないという問題意識に立って、幕末、明治期の多くの原典に当たってその真相を明らかにした。結論として、それまで一般的に使われていた「文庫」という言葉は、幕末期に欧米に派遣された幕府、藩の使節、従者、留学生などの見聞録ではほとんど使われず、「書庫」ないしその類語が多く使われたことをはじめて文献上で明らかにした。すなわち当時の見聞録には、「書庫」のほか「書院」「書籍館」「書物庫」「書蔵」「読書楼」「書蔵所」「蔵書庫」「典籍貯所」がライブラリーの訳としてあてられており、もっとも多く使われたのが「書庫」という言葉であることを明らかにした。また同時に福沢諭吉が『西洋事情』(1866)の中で訳した「文庫」という言葉は例外であったことも明らかにした。そして「書庫」が訳語とされた理由を、従来の「文庫」(ふみのくら)という未分化の文献一般をさす「ふみ」とするより当時本を一般的にさす言葉であった「書物」の「庫」として「書庫」という言葉を使ったことを明らかにした。また西洋の図書館の近代的な機能をまだ十分には理解するにはいたっていないが、「文庫」とは比較にならないほどの量を収蔵し、しかも世界各国の図書を集め、各国の各地に数多く設けられた文庫とは異質の存在として欧米のライブラリーを認識し、別の用語として「書庫」を使ったと指摘している。また箕作阮甫『八紘通誌』(1851年)の中でロンドンの大英博物館図書館、オックスフォード大学のボドリアン図書館をさして「公共書庫」という言葉が使われていることを指摘し、日本の文献に「公共書庫」すなわち「公共図書館」という用語が使われた最初であったという指摘をはじめとした点も貴重な業績である。)

②「“公共図書館”小考」(志賀英雄先生古稀記念号)『文化学年報』28号、1979. 3、pp.35～55

(本稿は、我が国において「public library」の造語として「公共図書館」

という用語が生まれるまでの幕末から明治初期にかけての翻訳の流れを原典をあげながら考究したものである。また近代図書館の「public」の意味が無料公開、公費支弁などにあることをわが国の公共図書館思想の導入の中でどのように認識、受容されていったかを追及している。本稿は、欧米のプブリックライブラリーという言葉が、早くも1850年代より「公共書庫」「公共書籍館」「共同大積書庫」などと訳されてきたことを指摘している。また我が国の18世紀後半から私文庫を多数の利用者に公開したいわば「公開文庫」の事例があったことも指摘している。さらに欧米の国立図書館や公立図書館が無料公開を原則としているという認識は、明治初年の『特命全権大使 米欧回覧実記』以後の各種の視察報告などでより明確に把握されていったことも指摘している。さらに明治5年の文部省博物局の「書籍館」（有料公開）から明治8年の「東京書籍館」（無料公開）などわが国に登場した現実の国立、公立図書館の諸相の中で無料公開という思想と制度がどのように確立していったかを考究しており、示唆に富んだ論考である。）

③「図書館学事始め」『同志社大学図書館学年報』1号、1975、pp.26～33

（４）図書館の歴史上の事項について論じたもの

（編著書）

①『図書館学とその周辺 天野敬太郎先生古稀記念論文集』巖南堂、1971

「近代日本図書館史覚書」pp.71～82

（論文）

①「文部省出仕市川清流研究覚書」『同志社大学図書館学年報』2号、1976、pp.37～47

（明治5年8月設置の文部省博物局「書籍館」は日本の近代図書館史の幕開け的意義をもつ国立図書館であったが、その設置の原因の一つとなったのが「市川清流」の建白書『書籍院建設建白書』であった。したがってこの建白書のもつ歴史的意義は大きいのであるが、その筆者・提出者である市川清流がどのような人物なのか従来ほとんど不明であった。本稿は、筆者の「“図書館”考」でも指摘されていることでもあるが、この市川清流が裏田武夫・小川剛が「明治・大正期公共図書館研究序説」（『東京大学教育学部紀要』8

号、1965)の中で推定した慶応2年の幕府英国留学生市川森三郎ではなく、文久2年幕府遣欧使節副使松平石見守康直の従者で渡欧日記『尾蠅欧行漫録』の著者でもある文部省の大学大写字生や編輯局11等出仕を歴任した「市川渡」と同一人物であることを究明した注目すべき論文である。)

②「明治初期翻訳教育書と図書館―「米国教育年表」を中心に―」『同志社大学図書館学年報』5号、1979、pp.20～26

③「図書館の歴史 私立大学図書館」『図書館界』19巻4号、1968、1、pp.169～171

(5) 目録法について論じたもの

①「近代目録法研究序説」『人文学』129号、1976、12、pp.1～26

②「目録の記録性と検索性」『人文学』132号、1978、5、pp.1～30

(本二論文は、ながく著者の問題意識にあった目録の記録性と検索性の問題を標目、記入、記述、排列の歴史を概観することによって究明し、ひいては目録の目的を問おうとしたものである。そのために①では、西洋の古代から中世、そして近代へと発展してきた目録の歴史的側面を概観することによって目録や目録法の本質に迫ろうとしている。②は、特に目録の記録性と検索性に焦点を当てて理論的解明を試みた労作である。)

(6) 読書論

①「日本人と読書」『同志社大学図書館学年報』3号、1977、pp.23～28

(7) 書誌について論じたもの

(編著書)

①青木次彦編著『「新女界」解説・総目次・執筆者索引』友愛書房、1975、86p

(論文)

①「『国民の友 第一集』の出版とその周辺」『磨研録』(私立大学図書館協会西地区部会研究紀要)5号、1968、4、pp.70～77

②「湯浅半月覚え書」『日本古書通信』291号、1968、7、pp.4～6

- ③ 「『国民之友第1～4集』の書誌学的研究」『文化学年報』19号、1971、3、pp.31～40
- ④ 「『新女界』総目次 付『新女界』刊行一覧表（1巻1号～11巻12号（明治42年4月～大正8年2月））」『人文科学』1巻3号、1971、12、pp
- ⑤ 「『不如帰』の翻訳本と関連書誌（含『徳富蘆花『不如帰』翻訳本書誌試稿』）」『文化学年報』21号、1972、4、pp.1～21
- ⑥ 「半月湯浅吉郎書誌」『同志社大学図書館学年報』4号、1978、pp.39～53

（8）その他（ガイドブック、通信などに執筆したもの）

- ① 日本図書館協会編『図書館ハンドブック』日本図書館協会、1952

「蔵書の管理」 pp.371～381

（本書は日本図書館協会が創立60周年記念として、図書館事業の企画や図書館員の日常業務の簡便で信頼できるハンドブックとして出版した最初のものである。青木は、「図書の整理と保管」の中で、「蔵書の管理」部分を執筆した。執筆の内容は、蔵書管理の意義、保管と運用の背馳作用、図書の集中保管と分散保管、資料保管の場としての建物管理、蔵書の排架、蔵書の点検、蔵書の愛護と障害、消毒と防虫・殺菌・防腐剤、図書の手入れにわたっており、蔵書管理の基本部分が正確におさえられている。）

- ② 日本図書館研究会編『大学生と図書館』日本図書館研究会、1981

「（第5章第2節）基本的参考図書とその利用法 人文科学」 pp.79～96

（本書は、以後数年に一回と改定されていくが、本書は大学生の図書館利用のための入門書として編纂された最初のものである。大学生が図書館の利用に当たって、最初に知らなければならない文献は参考図書であるが、その中でも基本となるものを厳選し、社会、人文、自然と分け、青木は人文科学の分野を担当、主要な参考図書を取り上げ、利用方法について簡潔な解説を付している。）

- ③ 「Library is public」『同志社大学図書館学会だより』14号、1958、p.4

（9）図書館学関係以外のもの

- ① 「京都廃常住寺小考」『史迹と美術』19巻3号、1949、5、pp.87～98

3、対外活動

青木教授の第三の業績としてあげなくてはならないのは図書館界への貢献である。その中でも戦前の「青年図書館員聯盟」を継承し、1946年1月に設立された「日本図書館研究会」の事務を1949年10月から1952年の半ばまで3年間担当したことである。研究会理事であった小野則秋同志社大学図書館主任が事務局を引き受け、大学図書館に事務局が置かれ、その実質的業務を青木司書が担当したのである。戦後直後ですべての物資が不足していた時代に機関誌『図書館界』や『日本図書館学叢書』『日本図書館研究会ブックレット』などの刊行事務、通信事務などの苦勞を背負われた。また理事会、総会、例会などの準備もひとかたならぬ苦勞があったようである。詳しくは参考文献にゆずるが、一つの全国規模の研究会を維持するには、いつの時代にも誠意と情熱と知識のある「縁の下の力もち」的人物が必要であることを教えられるのである。青木教授もそれにふさわしい人であったと思える。(参考文献：青木次彦「回想 同志社大学図書館内事務所時代」『図書館界』1996. 11、p.250)

4、おわりに

青木教授の業績を概観すると、まず同志社大学における図書館学教育における発展期を形成された功績が大きい。次に、研究面での業績もそれに劣らず大きいものがある。特に研究面では、書誌学、日本図書館史、同志社大学図書館学教育史の3分野で業績があった。すべて一見地味な研究であるが、多くの論考がその分野の基礎的研究に注力されており、綿密な考証と真摯な追求の上に成り立っているのが理解できる。ほとんどが歴史的基礎研究なので、今後も色あせることなく、参照、引用されていくものと思う。書誌関係は教授が司書としての資質をもっとも発揮した分野で、多くの情熱を注いだ分野であり、中でも『新女界』の書誌を始めて完成させた功績が大きい。次に、日本図書館史の諸論稿の中では、「公共図書館小考」と「“図書館”考」が青木教授の学問的姿勢と研究方法論がもっとも明確に表出された代表論文と思われる。この二論文は多くの新しい事実の提示と独自の見解が表明された労作であり、われわれは研究方法を含めて多くのものを学ぶことができると思うのである。また同志社大学図書館学教育史は原資料をふまえて綿密に

かつ系統だっではじめて通史として描出されたことは、教育面においても研究面においても後学にとって大きな贈り物となっている。今後わが大学の図書館学教育を発展させていくための礎となる研究成果と思われる。

(うじごう つよし。同志社大学社会学部教授)